

## 「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	北海道大学	拠点番号	J02
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 (英訳名)	スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化 (Making a Discipline of Slavic Eurasian Studies)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野：地域研究〉(地域間比較研究)(比較文明論)(トランスナショナル・イシュー)(社会構造・変動論)(国際社会・エスニシティ)		
専攻等名	スラブ研究センター、文学研究科(歴史地域文化学専攻・言語文学専攻)、教育学研究科(教育学専攻)、経済学研究科(現代経済経営専攻)、法学研究科(公共政策学連携研究部)、国際広報メディア研究科(国際広報メディア専攻)、言語文化学部(ロシア語教育系)		
事業推進担当者	(拠点リーダー名)	家田 修 教授	他 18名

### ◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p>&lt;本拠点がカバーする学問分野について&gt;</p> <p>本プログラムでは地域研究を動態分析へと刷新するため、国際関係論、歴史学、政治学、法律学、経済学、文学、環境学など関連する様々な学問領域と共同して、新しい地域研究分析手法としての「中域圏meso-area」概念を確立する。</p>
<p>&lt;本拠点の目的&gt;</p> <p>本学は、昭和22年に国立大学最古のロシア語・ロシア文学講座を開設し、昭和30年にスラブ研究施設(現スラブ研究センター)を設置するなど、日本のスラブ研究をリードしてきた。現スラブ研究センターは全国共同利用施設として国内的にはもとより、国際的にも有数の研究拠点として評価されている。本プログラムを通じて世界のスラブ研究に刷新をもたらし、理論的にも実践的にもスラブ・ユーラシア(旧ソ連東欧圏)研究を確立・先導する拠点を本学に創出する。</p>
<p>&lt;計画：当初目的に対する進捗状況等&gt;</p> <p>1)「中域圏」に関する基礎的及び各論的な研究班が立ち上がり、総合的にスラブ・ユーラシア学を構築する研究体制が出来上がった。その研究成果は国際シンポジウムやホームページなどにより国内外に発信されている。2)研究成果をスラブ・ユーラシア学として構築するため、講座「スラブ・ユーラシア学」の編集に着手した。3)若手研究者国際ワークショップを定例化した。4)地域を越えた研究連携として地域研究コンソーシアム発足を推進した。5)部局横断型大学院教育が開始され、順次拡充される予定である。6)研究情報資源の共同利用化を促進した。7)北海道という立地性を生かし、かつ地域に貢献する市民参加型の国際シンポジウムを開催した。</p>
<p>&lt;本拠点の特色&gt;</p> <p>冷戦終了と地球化の進行により従来の地域は流動化した。スラブ・ユーラシアはその典型である。すなわちスラブ・ユーラシアは地球化の中で、イスラーム復興、東アジア経済活性化、NATO・EU拡大等々、隣接外部世界から吸引力を受け、中央ユーラシア、シベリア・極東、東中欧等の中域圏が生まれた。今日のスラブ・ユーラシアは、多様な求心力と遠心力がせめぎあう、中域圏のゆるやかな東である。つまり本プログラムでは単にスラブ・ユーラシア地域の動態を解析するのではなく、隣接地域との相互作用の中で新地域形成が行なわれていることに着目し、ひいては地球化時代に対応する新たな地域論としてのスラブ・ユーラシア学を構築する。</p>
<p>&lt;本拠点のCOEとしての重要性・発展性&gt;</p> <p>スラブ・ユーラシア地域における体制移行は、現地実証研究の飛躍的拡充をもたらしたが、他方で、現地研究者が西側研究者に事実を供給する下請化が進行し、日米欧間、旧社会主義諸国間のヨコの研究協力が衰退するという副作用が生まれた。本プログラムではこの弊害を日本発信で解消し、西側及び旧共産圏の研究者が相互的協力関係を再建するための媒介的役割を担う。また、日本にとって重要な隣接地域である極東・シベリアの分析に対して必要とされる資源配分、意思決定過程等の認識枠組を構築し、合わせて次世代の専門家を養成する仕組みを作る。</p>
<p>&lt;本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果&gt;</p> <p>1)日本がスラブ・ユーラシア学の世界的拠点となる。地球化時代にふさわしい地域研究の方法を、他地域の専門家にも提唱する。2)地域研究間の垣根を越えた協力体制を創出する。3)研究調査成果や学術資料の逐次的電子情報化により世界的な研究情報の共有化が生まれる。4)部局横断型の教育指導体制が構築され、他大学にない本学独自の研究教育拠点が生まれる。5)本拠点を通して全国の若手研究者が世界的研究動向の第一線に参加し、我が国の地域研究全般の水準が向上する。</p>
<p>&lt;本拠点における学術的・社会的意義等&gt;</p> <p>本プロジェクトは動態分析として地域研究を刷新し、さらに隣接世界との相互作用をも分析対象としている。地域研究が地域別の垣根を越えて緊密に協力する関係が目指され、これは地域研究を外向きに発展させる契機となる。また若手研究者はもとより研究職以外の地域専門家をも取り込んだ次世代ワークショップなどにより研究成果の社会還元が図られる。</p>

### ◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価)</p> <p>当初計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される。</p>
<p>(コメント)</p> <p>本プログラムはスラブ研究センターが培ってきた世界的研究拠点としての実績を踏まえつつ、地域研究を開放性や相関性の方向で刷新し、スラブ・ユーラシア全域ひいてはユーラシア全体に関する新たな認識の枠組みを提示することを目的としている。</p> <p>人材育成、有機的連携、研究活動など、堅実に当初計画を実施に移しており、国際競争力のある拠点として形成されつつある。具体的には「中域圏」の概念を精緻化して、新しい地域研究として系統的に学問の枠組みと方法論を出してきている。理論化にチャレンジしたスラブ・ユーラシア学地域研究として大いに期待される。</p> <p>また、地域間比較にも配慮して、若手研究者育成、国際的発信など更なる努力によって、一定の拠点形成を大学、日本、世界と輪を広げて行くことが可能であろう。</p>